

令和5（2023）年度

白岡市教育委員会の
点検・評価に対する意見書

吉 野 高 男

田 中 裕 子

令和6（2024）年3月

令和6年3月29日

白岡市教育委員会の点検・評価に対する意見書

吉 野 高 男 (よしの たかお)

(元白岡市立小・中学校校長会会長、元白岡市立南中学校長)

田 中 裕 子 (たなか ひろこ)

(白岡市文化財保護審議会委員、元埼玉県立歴史と民俗の博物館副館長)

はじめに

《白岡市教育行政の基本理念》

白岡市教育委員会の基本理念は、『「学び楽しむまち」を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な人間を育成するとともに、家庭・地域・学校が一体となって、市民一人一人のライフステージに応じた教育・学習活動を推進する。また、特色ある地域文化を活かしつつ、「白岡らしさの発見と創造」を図り、あらゆる機会と場所で自由に「学び」「楽しみ」「創る」ことのできる生涯学習社会を実現する。』ことを目指している。

《本制度の趣意》

この白岡市教育委員会点検評価報告は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律（昭和31年法律第162号）第26条第1項の規定に基づき、白岡市教育委員会（以下「教育委員会」という。）の権限に属する事務の管理及び執行の状況について、点検及び評価したものである。

この点検及び評価の対象は、「第6次白岡市総合振興計画（基本構想・前期基本計画）」、「第3期白岡市教育振興基本計画」等に基づき、令和5（2023）年度に教育委員会が実施・推進した施策等について、第三者的立場から、未来に向かって白岡市の教育の一層の発展を願って、公明正大に点検及び評価を行ったものである。

総合評価 …おおむね達成している （約86%達成）

今年度は新型コロナウイルスが季節性インフルエンザと同等の5類に移行したこともあり、本市でも事業のほとんどが予定どおり実施された。そのような状況下での点検・評価は、上記のとおりである。

《今年度特に注目すべき事項》

1 コロナ禍後における白岡市教育基本計画の諸施策の実践

第3期白岡市教育振興基本計画は、「学び楽しむまちづくり～次代を担う人と豊かな文化を育む～」を基本理念として計画・実践され、今年度は2年目の取組となった。新型コロナウイルス感染症もようやく収束し、多くの諸施策がコロナ禍前とほぼ同様に実施できるようになった。そのような中、担当職員の真摯な努力とこれまでよりも一層前向きな姿勢により諸施策が実施されたことを評価する。

また、学校教育においては、「主体的・対話的で深い学び」の充実からその深化が求められる中、GIGAスクール構想による1人1台端末を活用し、児童生徒の「確かな学力」の育成に取り組み、成果をあげていることを評価する。

また、それらの実践の成果として、本市の児童生徒は、全国学力・学習状況調査及び県学力・学習状況調査において、高い学力を維持していることを評価する。

2 地域と連携した学校教育及び社会教育活動の推進

本市では、地域の方々の協力で学校教育及び社会教育活動が進められている。学校においては、すべての小・中学校に学校運営協議会が設置され、登下校・授業・部活動・放課後・PTA活動等々のあらゆる場面で、多くの方々の協力がある。また、社会教育においても、生涯学習センター〔こもれびの森〕をはじめとする施設で多くの学びの機会を提供することや、スポーツを楽しむ機会の提供にも各方面で活動する多くの人の支えがあった。こうした地域と連携した「学び楽しむまちづくり」に着目して評価した。

《今年度の点検・評価の基本的視点》

- (1) コロナ禍後の状況下で教育振興基本計画に基づき施策が着実に実践されているか
- (2) 地域と連携した学校教育及び社会教育活動が着実に実践されているか

1 《家庭・地域の教育力の向上》に対する意見

(1) 家庭教育活動の充実

ア 親力の育成

家庭教育学級の合同講座は、4年ぶりに対面において2回実施された。いずれも子育て世代に関心の高いテーマ設定で、多くの人が出席した。後日、講師への質問事項及びその回答を市のホームページに掲載したことは良い取組であった。家庭教育活動に有益な機会の提供として評価する。これが各小・中学校における家庭教育学級での活動の参考になればさらに有益だ。

講座の内容や実施方法については、今後も検討を重ねて、より良い方法で実施してもらいたい。

イ 家庭教育活動における指導者育成

各小・中学校の家庭教育学級担当者が出席した打合せ会における講義や、市内の6小学校の就学時健診時に実施された「親の学習」講座の実施には、家庭教育アドバイザーが派遣された。そうした際に、アドバイザー間の情報交換会で作成したレジュメ等を配布及び活用したことは良い取組であった。

家庭教育アドバイザーの情報交換会は、課題を共有し経験を蓄積する場となることを期待したい。今後も、各PTAと連携・協力しながら家庭教育アドバイザーとしてのスキルアップを図るとともに、その機能を十分に発揮できるよう努めてもらいたい。

(2) 家庭・地域・学校と連携して子どもたちを育てる取組の推進

ア 体験的な学習機会・活動の充実

今年度も「田んぼの学校」は年間を通して実施できた。田植えや稲刈り等の経験が子どもたちの食育につながることを期待したい。11月には、収穫した米をお握りにして食し、稲わらでしめ縄作りまでを一貫して体験できた。この事業を通して、稲わらまでもが生活を支える素材であったことを学んでもらえたら喜ばしい成果である。

また、同じ「田んぼ」は生き物観察会の場としても子どもたちを楽しませたし、「夜の昆虫観察会」も子どもたちの人気を集めた。市域

には水田も広がってはいるものの、子どもたちが自然の中で生き物に直接触れる機会は少なくなっているのだろうか。こうした身近な自然に触れる機会は子どもにとっては貴重な経験となるので、これからも大いに提供してほしい。

夏休みには、コロナ禍以来となる宿泊を伴う「自然ふれあい体験教室」も開催され、多くの児童が参加している。ここでは、自然とのふれあいだけでなく、友達とのふれあいが何よりも嬉しいことだったはずである。

『いきいき kids』の発行は初号のみであったが、これによって広く情報を提供し、子どもたちの体験的な学習機会・活動の充実を図れるように引き続き努めてもらいたい。

全般に体験的な学習機会が数多く提供されたことを評価するとともに、農業従事者や大学生のボランティアなど事業を支えてくれる人材の確保も、引き続き今後の課題としてほしい。

イ 放課後や週末などの子どもたちの居場所づくりの推進

放課後子ども教室は、今年度も菁莪小学校と大山小学校で実施された。年間に実施されたプログラムは、マーブリング・水遊び・お団子作り・ペットボトル空気砲作り等々、多彩であった。

これだけのプログラムを実施するには、通常のスタッフだけでなく各々専門のスタッフの協力も必須となる。この事業を基本的に支えるスタッフが、PTAに限定されている訳でもなく、コーディネーターや教育活動サポーター、場合によってボランティアで構成されていることは評価に値する。子どもたちを、多くの大人たちが見ていてくれる安心感がある。

参加した子どもたちにとっては、授業や家庭ではできない体験等を楽しめるということで満足度は高い。事業を安全に実施するために、概ね参加児童の約半数程のスタッフ・ボランティアがサポートして事業運営に毎回尽力していることを評価し、この事業が地域の子育てネットワークづくりのさらなる構築につながっていくことを期待する。

ウ 地域の子育て支援活動の促進

今年度も地域の子育て支援組織である「町ぐるみん白岡」との共催

で学校応援団交流会とおやじの会交流会が開催された。こうして、各学校や団体が抱える課題を共有していくことは、連携・協力して活動を進めていくためにも重要である。また、こうした支援組織の連携が「放課後子ども教室」に活かされ、子どもたちに楽しい時間を提供していることも評価したい。

さらには、自然観察会「ひこべえの森 冬のつどい」では、「町ぐるみん白岡」、「白岡緑と土の会」、白岡市環境課及び生涯学習課の4者が共催して森の大掃除が実施された。参加者は94人。市内の中学生やPTA、「おやじの会」も協力している。ここでは、大人が組織する子育て・家庭教育にかかわる団体（組織）だけでなく、中学生も一緒に作業できたことは貴重な体験となっただろう。作業後の炊き出しや、落ち葉等で焼き上げた焼き芋の味は格別だったに違いない。

今後はこうした団体の担い手を充足させることにも注力し、イベント等を通して交流を深めて、地域一体となった子育て支援の輪を広げる努力を続けてもらいたい。

2 《学校教育の充実》に対する意見

(1) これからの時代に求められる資質・能力の育成

ア 確かな学力の育成

1人1台端末を活用して「主体的・対話的で深い学び」の充実を図るために各校で研修を推進し、課題発見・解決能力の育成を図ったことを評価する。

また、本市の児童生徒は全国学力・学習状況調査及び県学力・学習状況調査において、全国平均・県平均を上回り高い学力を維持しており、このことは評価できる。

今後は、「主体的・対話的で深い学び」の充実からその深化と恒常化を目指して「協働的な学び」を中心とした授業づくりの研修・実践が全ての学校において推進されることを期待する。そして、本市の全ての教室が誰もが互いにつながって学び合う教室であることを願う。

イ 社会変化へ対応する力の育成

外国語教育、国際理解教育の充実のため、ALTを全中学校に各1名また、小学校6校に対し2名配置し、成果をあげていることを評価する。

今後は、小・中の連携や授業時以外のALTの積極的な活用を促し、一層質の高い活用を期待したい。さらに小学校においても全ての学校に配置できることを期待する。

1人1台端末を生かした教育活動を推進する上で、情報モラル教育は必須である。児童生徒、保護者への啓発および教職員の研修の実施などに取り組んでいることが評価できる。今後、保護者への啓発活動をさらに工夫して一層広く多くの保護者に「自分事」として心に届くものになることを期待する。

(2) 豊かな心、健やかな心の体の育成

ア 体験的活動の推進と豊かな心の育成

コロナ禍の収束を迎え、体験活動をほぼ従前に近い形で実施したことを評価する。

特別の教科道徳を着実に実践したことと家庭用「彩の国の道徳」の

周知により道徳教育の充実を図ったこと、そして人権教育の推進を図ったことを評価する。家庭用「彩の国の道徳」については、中学校における家庭への啓発が一層求められる。

イ 命を大切にすゑ教育の推進

教育相談の充実のため、各校が定期的に教育相談連絡会を実施し、それに指導主事も出席し、学校と教育委員会が積極的に情報共有することにより、早期解決に努めたことを評価する。

全小学校に支援相談員を、全中学校にさわやか相談員を、さらに中学校にはスクールカウンセラーを配置することにより、いじめ防止や不登校児童生徒対策にきめ細かに対応したことを評価する。可能であるならば、スクールカウンセラーを全中学校に毎月4回配置し、小学校にも出向くことができるような環境が整うことを願う。

ウ いじめ防止対策の推進

いじめ防止対策推進委員会(定例会)を着実に実施し、協議事項を各校に周知することでいじめ防止について啓発を図ったことを評価する。

しかしながら、令和5年6月にはいじめ重大事態報告書が提出されている。教育委員会・学校は、この提言の内容を十分に理解し、取り組んでいただきたい。

さらに、いじめ防止の取組は、不断に継続することが何よりも大切である。学校と家庭・地域並びに行政機関が強く連携して子ども達を見守る体制をしっかりと築いていかなければならない。特に学校においては、いじめの未然防止・撲滅のための取組をこれまで以上に確実に推進することを強く願う。

エ 心身の健康の保持増進

新型コロナウイルス感染症対策にかかる制限も大幅に緩和されたが、アフターコロナの時代としてインフルエンザ等他の感染症を含め基本的な対策を怠ることなく、子ども達が互いのぬくもりを感じながら本当にふれあいのある学校生活を送れる時代が続くことを願うばかりである。

ヤングケアラーの問題は現在、喫緊の社会問題となっている。本市

は教職員研修を実施するとともに中学生に対し講座を開き、教職員のみならず生徒もヤングケアラーへの理解を深められたことを評価する。

(3) 教職員の資質・能力の向上

ア 教職員の資質・能力の向上

G I G Aスクール構想を推進する上で、教職員の I C T、情報管理(含セキュリティ研修)研修は欠かすことができない。本市では計画的に開催し、スキルアップを図っていることを評価する。

教員の質の低下が叫ばれる中、若手教員の育成は重要課題である。本市では新採用者、2年次、7年次にあたる教員の指導力を高めるため、研究授業を中心とした実践的研修を実施しており、このことは評価できる。今後、授業研究を中心に「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりを一層深める研修となることを願う。また、中堅教員対象のミドルリーダー育成をねらいとした研修の一層の充実にも期待するところである。

白岡市教育の日の研究発表会がコロナ禍前のように行われたことは喜ばしいことである。他校、さらには異校種の授業を市内の全教職員が実際に参観して学べる機会は決して多くはない。願わくば、委嘱校の実践が他校にも着実に広がり、定着されることを強く望む。この取組は貴重であり、継続を願いたい。

イ 教職員の働き方改革の推進

教職員の働き方改革は、国をあげて早急に解決していかなければならない課題である。本市は、業務内容の精選に早くから取り組んできており、実績がある。とはいえ、中学校では部活動の指導が教職員にとって、心身の負担を強めていることは過去から現在においても否定できない。そのような課題を受け、本市では県内においていち早く一昨年度から持続可能な部活動の推進に取り組んできている。地域クラブとして今年度は13部活(後期に21部活)を実施し、さらには生徒の今日的なニーズに応じたダンスとプログラミングを実施していることなどを高く評価する。部活動を地域クラブへと移行すれば、それで中学校教職員の働き方改革が完結するわけではないが、大きな歩み

であり、今後も研究実践を重ね、生徒も保護者も教員も納得できる形の地域クラブを実現していかなければならない。そうしてこそ初めて生徒としっかりと向き合う時間が確保され、「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりに勤しむことができる。一層の加速感をもって取り組んでほしい。

(4) 家庭・地域・学校が一体となった子どもの育成

ア 家庭・地域・学校の連携・協働

昨年度において、全小中学校の学校運営協議会の設置が完了した。定期的に会議を開催し、地域の実情を踏まえた特色ある学校づくりの推進に大きく寄与している。また、教育委員会が主体となって各学校運営協議会間をつなぐ役割を果たした。このことは高く評価できる。今後は、その充実を目指し一層盤石な組織として発展することを期待する。そのために、一人でも多くの保護者、地域住民に正しく深い理解をしてもらうための啓発活動を継続的に行っていくことが大切であると考えます。

イ ふるさと意識の醸成

児童にふるさと意識を身に付けさせるためには、小学校3・4年生での社会科授業で郷土理解を深めさせるところが大きい。とりわけ社会科副読本「しらおか」の活用は大切である。副読本の編集に際し、編集委員会を3回開催し現場の教員の声を反映させて編集していることは意義がある。特に、県内でもいち早くデジタル版を作成し、それをタブレット端末にインストールして活用していることが評価できる。

女子栄養大学学校給食・食育研究室と連携し、地場産物を使用した家庭で作れるレシピの開発を進めたことにより、児童・生徒のふるさと意識の醸成を図ったことは評価できる。

(5) 児童生徒が安心して通うことができる教育環境の整備

ア 教育環境の整備・充実

劣化が進む校舎の外壁について現況調査を行い、安全確保に努めている適正化のために素案作成から内部会議を開催したこと、また、そ

の視点から大山小学校の統廃合の手続きを進めたことは評価できる。引き続き、児童・保護者を第一に進めるよう努めてほしい。

イ 安全安心の確保

教育委員会が主体となって、校長会・教頭会において、施設設備を含めた安全管理の徹底について指導を行ってきたことで大きな事故なく学校運営が行われていることを評価する。また、学校教育全体で児童生徒への安全教育が行われ、大きな事故が起きていないことを評価する。しかしながら、今後さらに予想される交通事情の悪化を考えると、小学校高学年から中学生の自転車の乗り方の啓発指導の充実が一層大切になるであろう。

(6) 多様なニーズに応える教育活動

ア 特別支援教育の充実

全小・中学校に特別支援学級を設置し、教育補助員の活用や県立特別支援学校との連携、計画的な巡回指導等により特別支援教育の充実を図っていることを評価する。また、近年の状況を踏まえて通級指導教室を3学級設置し、対象児童の指導が適切に行われていることを評価する。一方でこの教室を担当する教員には高い専門性が必要なので継続的に研修を行ってほしい。さらに、見通しをもって担当できる教員の育成に努めてほしい。

イ 不登校児童生徒への支援

不登校児童生徒数の増加は、国全体で見られる課題となっている。本市では教育相談体制の充実を図って対応しているが、特に教育支援センターの役割は大きい。適切な人員配置や昨年度から常勤の所長を任用するなどして着実な運営ができていることを評価する。

ウ 外国人児童生徒・帰国児童生徒への支援

本市においても外国人児童生徒数は年々増加している。対象児童生徒が1日も早く級友との仲を深め、学級に適應できるよう日本語指導補助員を適切に配置していることを評価する。今後は、多様化が一層進むことが予想されるので多くの言語に対応できるよう人材を確保し

ておくことが望まれる。

エ 経済的支援

本市では、経済的理由によって就学困難な児童生徒の保護者に対して就学援助制度、特別支援就学援助制度、入学準備金貸付制度などを講じて経済的支援を行っていることを評価する。今後、市民・保護者へあらゆる手段を講じて制度の周知を一層強く進めていくことが肝要である。

3 《社会教育の充実》に対する意見

(1) 市民ニーズに応じた学習メニューの提供や図書館機能の充実

ア 生涯学習活動の推進

「学び楽しむまち」づくりのためにも、市民の意向やニーズに合わせた学習機会の提供は継続的に実施されている。

今年度も「ペアーズ！しらおか」や公民館講座で多彩な講座が実施された。市民企画講座では、健康長寿等をテーマにした講座が人気であったという。コロナ禍で中断されていた合唱講座は久しぶりの実施で、このように参加者が主体となれる講座の重要性が痛感される。

「ペアーズアカデミー」では、「SDGs(生物、環境)」や「国際」など多くの講座が実施された。そのうち後者では、中国や韓国の言語や情勢について学んだということで、「国際」というテーマを身近に感じることができたのではないだろうか。

中央公民館でも、多彩な講座が実施され、体育室や調理実習室なども活用されている。なかでも、「夏休み宿題応援講座」や「夏休みこども講座 親子の楽しい料理」など、子どもや親子が楽しめる講座を実施してきたことを評価したい。中央公民館フェスティバルでも、2日間で約600人の来場者で賑わい、公民館で活動するサークルの成果発表の場として貴重な機会となった。

今後も、関心が高い講座を計画したり、受講方法を工夫したり、多くの市民が参加しやすい学習機会の提供に努めてもらうとともに、インターネット利用が困難な年齢層に対しても情報が届くような工夫を継続してほしい。

特に、「生涯学習ガイド」が作成されなくなったため、紙媒体である『広報しらおか』の果たす役割は増大すると思われる。「いつでも・どこでも・だれでも」学べるようにするためにも、確実な情報を分かり易く、幅広い年齢層の市民に届けてもらいたい。

イ 生涯学習施設・設備の充実

生涯学習センター〔こもればの森〕は、昨年7月には、開館からの5年間で来館者100万人を達成しており、多くの市民が利用する施設である。

一方の中央公民館でも、多彩な講座が実施され、老朽化は認められるが体育室や調理実習室なども活用されている。中央公民館フェスティバルでは、2日間で約600人の来場者で賑わい、公民館で活動するサークルの活動拠点として親しまれている施設であることがわかる。

両施設とも、多くの利用者が安心・安全に施設を利用することができるように、施設の適正な維持管理に努めてもらいたい。それには、日頃の点検などが欠かせないし、防災の備えも重要となる。今年の初めには能登半島で大きな震災が起きている。こうしたことを「自分事」として捉えて備える姿勢を求めたい。市民の生涯学習の場であるからこそ、施設・設備の地道な点検を欠かすことなく、適正な維持管理を徹底して、日常業務に取り組んでもらいたいものである。

ウ 図書館機能の充実

生涯学習センター〔こもれびの森〕は、多くの市民が利用する施設であり、昨年7月には開館から5年間で来館者100万人を達成した。

その100万人目の来館者は市内在住の御家族で記念品が贈られた。この記念品は、「リストから自由に選べる本」で、当該者は大変喜んでいった。図書館機能を有する「生涯学習センター〔こもれびの森〕」ならではの「心に残る記念品」といえるだろう。こうしたことは、業務の目標には掲げにくいことだが、日頃から市民の気持ちに沿うことを目指して業務に取り組んでいることの表れと感じた。図書館機能の根幹である資料の予約業務についても、いくつかの改善が実施されたことも評価したい。

市民との協働による事業の実施という点では、日頃の運営からボランティアが図書館事業を良く支えている。後述する「こもれびの森まつり」においても、大きな役割を果たしていた。今後も、この協働体制は是非とも継続してほしい。

集会室1・2で実施される「ファンファンシネマ」も人気の催し物で常連客も多いようだ。上映作品はジャンルが偏らないように職員が選定しており、夏休みには子ども向けのアニメを上映するなどの配慮もみられた。今後は、上映作品を市民からのリクエスト（ただし上映権付の作品に限定）で選定するなど、市民のニーズに応えるのも良い方法かもしれない。

図書館としての機能は、目標に掲げた事項を十分に満たしているものであり、今後も継続して業務に臨んで欲しい。

エ 子どもの読書活動の推進

本市では「白岡市子ども読書活動推進計画」に基づいた取組を進めている。これまでも実施されてきた「子どもの読書活動の推進」に係る様々な取組は着実に成果を上げているといえるだろう。今後のさらなる展開に期待したい。

子どもが本に親しむ機会は、体験事業からもたらされることもある。今年度は、こどもの読書週間事業として「みんなでとぼそう！紙ひこうき！」が実施され、その製作体験が科学図書への興味を引き出した。また、秋の読書週間には、帽子作りのワークショップと絵本の読み聞かせが実施された。新たに多彩なアプローチで本に親しむ機会を提供したことを評価したい。

他にも、夏休み子ども講座では「友だちにすすめたい本の帯とPOPポップの作り方講座」が実施され、後日、それらが展示されて多くの市民の目を楽しませた。

各小・中学校においても読書活動の推進に取り組んでいるところであり、今後も子どもの読書活動推進のため、図書館を核とした家庭・地域・学校等との連携を一層強化していくことが望まれる。

オ 枠組みを超えた生涯学習活動の連携強化

今年度は4年ぶり3度目の開催となる「こもれびの森まつり」が開催された。農業祭などの新たなイベントも加えてリニューアルされ、白岡市の新たな祭り「第1回しらおか秋の彩りフェスタ」の一部としての実施であった。

「こもれびの森まつり」だけでも、館内スタンプラリー、体力テスト、ミュージアムクイズ、おはなし会、あんぎん編み体験、古本市、布作品の販売、日本工業大学の協力による製作体験、社会福祉協議会コーナー等々、盛りだくさんの内容で、約3,600人が訪れて楽しんでいた。

また、図書館活動においてボランティアがしっかり活動していることは既に述べているが、この日の活動の売り上げを図書館への寄贈本

として還元してもらおう仕組みは良い取組だと感じた。ボランティアにとっては活動の励みとなり、図書館も蔵書が増えるという良い循環を生んでいる。古本市では購入本を持ち帰る紙袋も用意されていて、行き届いた配慮は市民に喜ばれていた。

こうした「市民との協働」を大切に、これまでどおり親しまれる図書館づくりを継続してもらいたい。

日本工業大学との連携は、昨年度から行われているが、枠組みを超えた生涯学習活動の連携強化を図るという観点からも意義がある。専門知識を持つ教授や学生からの説明は子どもたちに刺激を与えたことだろう。こうした体験からロボット工学に興味を持つ子どもが現れるかもしれない。イベント会場では、学生ボランティアが活躍していたが、人の出入りが多くて一般市民との見分けがつかないようだったので、識別できるようにビブス等（作業に従事するので吊り下げ名札は不適か）を着用してもらったら良いと感じた。この連携については、今後も一層強化されることを大いに期待したい。

あえて難をあげるとすれば、「こもればの森まつり」のパンフレットには当日のイベントが様々紹介されていたが、「定員」や「参加費」についても明記してほしかった。多くの市民がこのパンフレットを頼りにイベントに参加するのであるから、親切な記載を心掛けてほしい。

（２）人権教育の推進

ア 人権教育推進体制の充実

人権教育推進協議会研修会は４年ぶりに対面で開催され、総会及びDVD視聴が行われた。これまでは、家庭教育学級合同講座等とも併せたオンラインによる動画配信形式での実施だったが、多くの市民が参加できるように今後はより良い形で開催できるよう検討を重ねてもらいたい。

今年度の「人権作文・標語表彰式」は、子どもたちの作文と標語を表彰するに相応しい名称で行われた。発表者は市内の児童生徒で、作文４人・標語１０人が壇上で堂々と発表した。全体を通して手話通訳が付いたことは聴覚障がい者の理解を助けるだけでなく、参加者に手話を知ってもらう良い機会にもなったのではないだろうか。

こうして発表の機会が設けられたことも、市内のすべての小・中学

生が人権問題に向き合っこの課題に取り組めたことも、子どもたちにとって有益であったと思う。

また、コロナ禍で昨年度まで中止となってきた「“じんけん”ふれあいコンサート」は、「人権作文・標語表彰式」に引き続き、同日に4年ぶりに実施された。そこでは演奏者が直前に発表した子どもたちの作文や標語の発表にコメントするなど、事業のつながりが若干感じられた。ハンドベル演奏はクリスマス関連の曲が多く演奏されて、幼い子どもも楽しめるコンサートであった。

今後、もっと多くの市民に参加してもらいたいのであれば、「表彰式」と「コンサート」をどのように連動させて実施するのが課題であると感じた。

イ 啓発活動の充実

人権教育推進体制の充実を図るため、市人権教育推進協議会や埼玉葛地区人権教育推進協議会等と連携した各種研修会や啓発活動が実施された。「第32回埼玉葛人権を考えるつどい」は越谷市で開催され、舞台公演・作品展示・物品販売等を含めて盛況だったということで関心の高さがうかがえる。こうした機会が人権意識の醸成の促進に活かされることを期待したい。

「思いあうまち（人権尊重）」を社会教育の基本施策に掲げる本市では、例年市内の小・中学生が人権問題の作文や標語といった課題に取り組む、発表するという機会を設けてきた。この場は、広く市内の他の学校の児童・生徒の考え方を知る良い機会ともなっている。前述した「人権作文・標語表彰式」がそれである。当日の発表は限られた参加者に向けたものであったが、その発表内容はパンフレットにまとめて主に市内の小・中学校に配布されるということで、その有用性に期待したい。

本市の子どもたちが人権問題という課題に向き合ったということは、今後この問題について正しい理解と考え方をもち、身近な問題として考える啓発の場となったはずである。各学校での取り組みを評価したい。

(3) 文化・芸術活動の促進

ア 文化・芸術に触れる機会の充実

今年度の文化講演会は、〔こもればの森〕来館者100万人達成及び開館5周年記念事業として実施された。講演のタイトルは「明るく、元気に、一生懸命」、講師は落語家の林家正蔵師匠であった。定員を超える申し込みがあり、当日も大盛況。コロナ禍が収束してきたため首都圏でも様々なイベントが実施されるようになってきたが、それでも身近な場所でこうした講演会を楽しめるのは市民にとって嬉しいことである。参加者のほとんどが市内の60歳代以上で「広報しらおか」から情報を得たということであるから、紙媒体の広報誌が果たす役割はまだまだ大きいといえるだろう。このことは、今後の広報のあり方の参考にしてほしい。

また、この文化講演会には「来館者100万人目」となった家族が招待されていて、これは施設と来館者をつなぐ良い取組だと感じた。

講演内容はとても充実しており、会場は大いに盛り上がり、参加者の笑いが絶えなかった。アンケートの結果からも市民が存分に楽しんだことがうかがえた。

こうした、市民を笑顔にするイベントを提供したことを高く評価したい。

一方で、ランチタイムコンサートについては、出演者との意見交換を継続しているとのことだが、これまでの形態にこだわることなく、それぞれの立場にも配慮してより良い形で結果が示されることを願いたい。ギャラリーの利用に関しても、市民の要望に応えるとともにバランスよく活用されることが望まれる。

イ 市民の文化・芸術活動の支援

文化団体連合会には、様々な文化活動に関わっている市民が参加している。補助金の交付は、各団体の日ごろの活動の成果発表の機会としての文化祭実施や、当該団体の広報活動の支援につながるものであろう。市民の生涯学習活動を推進するためにも、社会教育団体との連携・協力を強化してもらいたい。その上で、公民館などにおける活動の活性化にもつながることを期待したい。

(4) 郷土の文化財に親しみ、理解し、市民の力で守り伝える活動の推進

ア 文化財の総合的把握の促進

白岡市文化財保存活用地域計画の策定後、昨年度からその計画に基づいて仏像調査が始まっている。その結果、平安時代末期作と年代が明らかになった木造阿弥陀如来坐像（青雲寺蔵）を新しく指定文化財とするなど実績を重ねている。この仏像について広く市民に知ってもらおうと、昨年11月には一般公開された。この公開は、同寺と白岡市教育委員会に加えて白岡遺産保存活用市民会議が共催で実施したもので128人の参加者が訪れている。調査の成果はもとより、それらを市民と協働で公開したことは、市民が身近な文化財に気づき誇りを持って守り伝える取組となるだろう。

また、埋蔵文化財の調査についても、発掘及び試掘調査が年間を通して地道に実施されてきた。これらの成果については、これまで通りきちんと整理し、報告書などで市民に公開し、情報を共有できるよう努めてもらいたい。

多くの業務に携わるなかで、文化財の総合的把握のための基礎的な調査が着実に進められていることを高く評価する。

イ 歴史文化の保存と継承

白岡市文化財保存活用地域計画について、その理解の促進を図るため、着実に様々な事業を進めてきたことを高く評価する。今年度は、計画どおりに白岡遺産保存活用市民会議が設立され、その活動は一層充実したものになるだろう。今後も、歴史文化の保存と継承の意識を市民に浸透させることに努めてもらいたい。

また、歴史文化の保存と継承のためにも防災体制の構築は欠かせない。今年初めには能登半島で大きな地震の被害が発生している。本市においても「文化財防火訓練」が消防組合等の協力を得て実施されたが、こうした訓練に真摯に取り組む、市民の文化財に対する防災意識を高めるように努めてもらいたい。さらには、災害が発生した時の備えとして文化財救出マニュアル等の整備も進めて欲しい。

ウ 歴史文化の情報発信・普及活用の充実

仏像調査の成果として、新しく指定文化財となった木造阿弥陀如来坐像（青雲寺蔵）について広く市民に知ってもらう機会として一般公

開が実施された。

この公開は、同寺と白岡市教育委員会に加えて白岡遺産保存活用市民会議が共催で実施したもので多くの人が見学に訪れた。このことは、これまで調査報告書及びパンフレット、広報誌・ホームページ等を活用した情報発信が行われてきたが、実際に文化財に触れる機会が如何に大切であるかを示している。今後の事業運営に活かしてほしい。

さらには、歴史文化の情報発信や普及活用の充実を図るために歴史資料展示室も活用された。多くの来館者の目に触れる場所にあるこの展示室では、展示だけでなく、「ハンズオンデー」など誰もが気軽に体験できるイベントも年間を通して実施している。さらには、歴史学習支援事業として小中学校へ出向くことで学校との連携も図られた。

第6回企画展「願いごとかないますように！」では、考古資料だけでなく石尊燈籠・獅子頭・しゃもじなど市民が親しんできた資料も紹介していた。展示会の名称に「白岡遺産」を加えたことで、この文言を広く市民に伝える役割も果たしているといえるだろう。「ミュージアムブックレット6」も継続して刊行していることは評価に値する。

この展示室には「明日を創る」という展示コーナーがあり、これまで市内の児童生徒が描いた「未来の白岡」というテーマの絵画が展示されてきた。〔こもれびの森〕開館5周年となった今年度は、これまで展示してきた絵画（105点）を1冊にまとめたブックレットを作成し、市内の小・中学校及び白岡高校にも配布された。この取り組みが、歴史資料展示室を身近に感じてもらう良い契機となることを期待したい。

今後もマスコミはじめ多くの媒体を活用した効果的な情報発信を継続し、事業の広報に努めてもらいたい。

エ 市民との連携・協働による歴史文化の保存・活用

白岡市文化財保存活用地域計画について、その理解の促進を図るため、これまでも様々な事業を進めてきたが、今年度は、白岡遺産保存活用市民会議が設立され、活動は一層充実したものになることが期待される。

ここには様々な立場の市民が参加しており、「白岡遺産」の考え方を市民に浸透させることが、地域の伝統行事等も支えることに活かされ

てくるだろう。新たに指定文化財となった仏像の公開事業は、所有者の青雲寺と白岡市教育委員会に加えて白岡遺産保存活用市民会議が共催で実施したものであり、多くの参加者が訪れたことは、市民会議の構成員にとっても励みになったに違いない。ネットワークの構築だけでなく、その活動を充実させていることを評価したい。今後も、市民との連携・協働による歴史文化の保存・活用を目指してもらいたい。

(5) 生涯スポーツの普及・推進

ア 生涯スポーツの普及・推進

ニュースポーツ教室（ボッチャ）は、スポーツ推進委員の支援を得ながら継続的に実施回数を重ねている。これまでの累計参加者は相当数に上るのではないだろうか。ボッチャは幅広い年齢層が同時に対戦できるうえルールも簡単なので、生涯スポーツに相応しい競技といえる。パラスポーツの理解促進のためにも、今後もこの取組は継続してもらいたい。ただし、各種資料の文言を今年開催予定のパリ大会を見据えたものに改めることが必要ではないだろうか。今後も日本選手の活躍が期待できるスポーツとして、広く市民の関心を集めるよう普及に努めて欲しい。

新体力テストは「こもれびの森まつり」で実施された。ここでも、スポーツ推進員の活躍が際立っていた。職員だけでは運営が難しいなか、円滑な進行を担う姿は頼もしい。シャトルランでは若者の参加もあり白熱し、参加者のなかには、「社会人になると体力テストを受ける機会が無くなる。自分の体力を知るためにも、このような体力テストを市が毎年実施してくれると気軽に参加できるので嬉しい。」と話す人もいた。

1月には新春マラソン大会も4年ぶりに開催された。参加者が1,800人を超えたことから、ランナーがこの大会を心待ちにしていた様子がうかがえる。競技は、学年や年齢等に応じて細かく分けた29種目があり、皆が楽しく参加できるように配慮されていた。参加者からは、「種目がたくさんあるので気軽に家族や知人・友人と参加できる。」「抽選会も楽しみ。」と好評であった。

前日の降雪で設営テントにアクシデントはあったものの、当日は快晴に恵まれて予定通り競技は進められた。会場ではビブスを着用した

多くのボランティアスタッフが運営の補助にあたっていて、なかには連絡係として働く中学生の姿もあり頼もしく感じた。ゴール付近には市内総合病院のスタッフが控えていて、体調面のケアも万全であったし、司会者やキッチンカーの導入が大会を盛り立てていた。

愛らしいチアリーダーや囃子連の応援を受けてスタートした選手たちは、快走して次々とゴールしていた。このように安全な大会運営を進めてきた実行委員会はじめ全てのスタッフの労をねぎらいたい。多くの人の協力で生涯スポーツの普及・推進が進められたことを高く評価する。

イ スポーツ指導者の育成

社会体育関係団体指導者等研修会などの研修は、成果を上げるためにも引き続き継続することが重要だと思うので、こうした研修会が障がい者スポーツも含めた多様なスポーツの指導者育成につながるよう期待したい。

本市では、ニュースポーツとしてボッチャやモルック等を市民が体験する機会がある。ボッチャ教室の多くは小学校の体育館を会場に実施され、モルックは放課後子ども教室でも取り上げられている。こうした競技の実施にはスポーツ推進委員が大きな役割を果たしている。

今後も生涯スポーツの普及・推進を図るとともに安全にスポーツ事業を実施するためにも、こうした担い手を充足させるように努めて欲しい。

ウ スポーツ施設・設備の充実

スポーツ施設・設備の維持・管理については、経年劣化への対応等、年間を通して適正に実施されている。また、指定管理者による「B&G海ごみゼロフェスティバル2023」では、カヌーを使って柴山沼周辺の清掃が実施された。これは、カヌー体験を清掃に活かした合理的な取り組みとして評価できる。

また、「水辺の安全教室：着衣泳&ライフジャケット体験」では、大山小学校の全学年の児童49人が貴重な体験の機会を得ている。遭難した場合には救助を待つ間に弱気にならないように皆で歌を歌うことが有効だとして、児童たちは浮きながら校歌を歌ったという。家庭で

は困難なものも専門スタッフと共に体験できたことは本当に貴重である。

多くの市民にスポーツを楽しむ機会を提供するためにも、今後も適切な施設の運営を続けてもらいたい。

市民が安心してスポーツに親しめるよう、その施設及び設備が適正に管理運営されてきたことを評価する。

5 さらなる発展のために

(1) 長期にわたるコロナ禍を通して、子どもはお互いの息づかいを感じながら、子ども同士のつながりを通して成長することを私達は強く再認識した。また、笑顔で豊かに暮らす大人達の温かい眼差しを受けてこそ初めて白岡を愛する子どもに成長していくことも痛感した。

今年度より感染対策が緩和された。この機を逃すことなく、白岡の子ども達が笑顔であり続けられるよう最大の努力を払わなければならない。そのためには、まず、学校教育において、本市の全ての教室を真の「学び合う教室」にすることが最も大切である。今後の大きく変化する社会を生きぬくためには、「協働」により仲間とつながることの大切さを身につけることが大切だ。

「主体的・対話的で深い学び」を画餅に終わらせてはならない。各校の取組の自主性も大切ではあるが、この学びを確実なものにするためには教育委員会の指導力が何よりも肝要である。市内の全ての学校が「学び合う」学校に変わること、白岡市の子ども達は、学力調査の点数で表しきれない本当の意味での「確かな学力」を身に付けられる。骨太の本物の学力を身に付けた子ども達は、いずれ白岡を担い発展させる大切な人材になる。

成長した子ども達が市外へ出て、グローバルに活躍する人材になることは喜ばしいことである。一方で市外、海外で活躍しながらも「ふるさと白岡」を忘れることなく、いつかは白岡に戻ろう、白岡に根を張って生きていこうと思う意識を失わないでほしいと思うのも正直なところである。子ども達が白岡を愛し続けるためにも大人達が笑顔で豊かに学び続けている姿を示すことが大切である。そして、誰もが生涯にわたって学び続けられる環境が整うことで大人達の連帯と絆が生まれる。コロナ禍後の新しい日常の中で、文化・芸術・スポーツの活動や事業がコロナ前以上に人々の「連帯」や「協働」を促すものになることを期待する。「やってみたい」「行ってみたい」と思える事業を従前以上に積極的に展開することが必要であろう。

基本理念「学び楽しむまちづくり～次代を担う人と豊かな文化を育む～」の実現のためには、子どもはもちろん大人も互いに学び合うことが肝要である。「学び合い」によって連帯と協働が生まれ、絆ができる。それは市民同士のつながりを確固たる共同体（コミュニティ）にも変貌させる。そのコミュニティの実現のために教育委員会がリーダーシップを発揮することはもちろん、さらにファシリテーターとしての役割を果たすことも期待する。

(2) 今年度は新型コロナウイルスが季節性インフルエンザと同等の5類に移行したこともあり、本市でも事業のほとんどが予定どおり実施され、市民も大いにそれを享受したことだろう。

しかも、単純にコロナ禍以前に戻したわけではなく、「こもればの森まつり」は他のイベントと合同での開催としたり、マラソン大会では民間活力を導入して新しい試みを実施するなど、進取的な取組がなされたことを高く評価したい。一方で、前例どおり何年も同じ文言を使っている例も見受けられる。これらは、日々の業務の中で留意して見直してほしい点である。常に時勢に遅れることの無いよう日常の業務に取り組んでもらいたい。

近年、「フレイル」という言葉を良く耳にする。これは、病気ではないけれども年齢とともに筋力や心身の活力が低下して、介護が必要になりやすい健康と要介護の間の虚弱な状態のことだという。この予防には、基本的な健康管理の他にも「運動で筋力づくり」「外出と交流」が重要なこととされている。

令和3年度に実施された「白岡市スポーツ推進計画に関するアンケート調査」でも、スポーツに親しむ目的を「健康の維持増進や体力の維持向上」「仲間（友人）づくり」等とする市民が多かったという結果が示されたが、これはまさしくフレイル予防の目指すところと合致する。

スポーツに限らず様々な生涯学習を通して、学び楽しみながら市民同士の交流が深まり、それが健康増進にもつながるのであれば喜ばしいことである。

「学び楽しむまちづくり」を基本理念としている本市において、教育委員会が提供する学びは多岐にわたる。それらは、子どもから高齢者まで幅広い年齢層の市民に受け入れられるものでなくてはならない。多くの経験・体験を積み重ねることが「ふるさと意識を醸成」し、それが「ふるさと白岡」を誇りに思う気持ちへとつながることも、また忘れてはならない。

今後も、教育委員会という組織全体として連携を図りつつ、本市の発展のため、日々の努力を積み重ねてほしいと切に願うものである。